

# 五塚原古墳前方部南西隅角、西側斜面の調査

所 在 京都府向日市寺戸町芝山3-1-6ほか 調査期間 平成29(2017)年8月1日～11月10日(予定)  
調査所管 向日市教育委員会 調査機関 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター (担当 梅本康広・中島信親)  
調査協力機関 寺戸財産管理会 寺戸町連合自治会 寺戸農家組合 大牧自治会 向日市公園住宅課・総務課

## 1 はじめに

当センターでは向日丘陵古墳群の保存と活用の方法を探る目的で、五塚原古墳を対象に墳丘の遺存状況と範囲、内容の確認調査を実施しています。

五塚原古墳の墳丘は後円部が3段、前方部は2段に築かれ、前方部の形状は細くて長い「バチ形」を呈し、その平面形態は奈良県桜井市纏向古墳群の東田大塚古墳と近似しています。また、墳丘の築成方法は後円部と前方部の「段築」が連続せず、前方部の側面に「斜路状平坦面」を備えており、箸墓古墳と同じ構造であることから、最古段階の前方後円墳のひとつであることが明らかにされています。

墳丘の規模は全長91.2m、後円部径55m、同高8.7m、前方部長40.5m、同前面幅33m、同高2.1～4.0m(くびれ部付近から前方部頂)、くびれ部幅15mの復原値が得られてきました。

今年度は前方部南西隅角及び西側斜面に調査区を設定し、前方部前半の形状と段築構造を正しく捉えるとともに墳丘の遺存状況ならびに規模、範囲の把握、遺物の存否を確認するために調査を実施しています。

## 2 調査の成果

〔第1調査区〕 墳丘の南北中心線から西へ12mの位置に6m四方の調査区を設定し、前方部南西隅角の形状及び葺石・礫敷の遺存状況、墳丘外周の構築状況などを確認しました。

**隅角** 前方部の側面から前面にかけて折れ曲がる角の部分にあたり、その境界に稜線(接線)が通ることから墳丘のなかでも最も脆弱な部分といえます。墳丘の現状を見ても隅角部分は角を欠く形状を呈しています。調査の結果、南西隅角付近は墳丘斜面の流失によって稜線部分は扁平になり、葺石や礫敷も失われていました。盛土が遺存する部分の斜面勾配は緩く、想定される頂角付近では地山(段丘層)が検出されました。

**前端** 墳丘の裾にあたる基底石とその外周に広がる礫敷を検出しました。基底石は5石分を確認しましたがその設置面高は61.70mで、南東隅角付近からみると0.7mほど高い位置にあります。その成因は西側ほど地山が高く南側へすこし張り出していたためと考えられ、これを削り出して低い段のように仕上げたものとみられます。墳丘斜面側の葺石は2段程度を残すだけで、上部は流失しています。基底平坦面の上面には5cmほどの小礫が施され、その一部は西側2.5mまで確認できることから、基底石についても隅角の頂角付近までは設置されていたことがわかります。

**側端** 前端側から隅角をはさんで西へ折り返した箇所では、基底石6石とその外周に広がる礫敷を確認しました。前端側と同様に基底石の西側は幅0.6mほどの平坦面をはさんで下降し、高さ0.3mほどの削り出しによる低い段が確認できます。さらに西側では、傾斜面がつづき濠状の窪地の一部を捉えることができました。本調査区ではその南端を確認したものと思われます。窪地内には葺石が抜け落ち集積していましたが、これらを取り除くと小礫が詰まった状態で検出されたことから、この傾斜面にも礫を施していた可能性が考えられます。

〔第2調査区〕 墳丘の南北中心線から西へ5mの位置で長さ13m、幅2mの調査区を設定し、前方部の側面西側の形状及び段築構造、葺石・礫敷の遺存状況、墳丘の範囲を確認しました。

墳丘裾の基底石は総延長5.5m分を検出しました。長さ15～20cmサイズの扁平な石材を縦に長くそろえて直線的に列べる傾向が強くうかがえます。基底石の設置面高は61.35mで、そこから墳丘斜面は0.4mの高さまで急に立ち上がり、第一段平坦面までは緩い勾配となります。葺石は小口積みによって葺き上げられていますが、ほとんどの箇所ですり出し、一部で崩れるなど変形しています。第一段平坦面は「斜路」状につくられ、西側からみると前方部後半は水平ですが、前半は先端に向かって高さを増していき前方部の墳頂と同じ角度ですり上がります。「斜路状平坦面」は、平成26年度に実施した東側斜面の調査で初めて確認されましたが、今回、西側斜面でも約3m分を確認しました。その南端は斜面が崩れて流失しています。検出された幅は0.7mで5cm大の礫を隙間無く詰め込んでいます。第二段斜面側では基底石を12石分を検出しました。2～4石ごとに水平に置いては1石分上下にずらしながら階段状に高低差がつくように列べられています。

第一段斜面は水平距離で約3.0m、高さ約2.0m、第一段平坦面の遺存する幅約0.7m、第二段斜面は墳頂端が崩れているため想定となりますが、水平距離は約3m、高さ約2mの規模に復原できます。

墳丘裾の外側は、約0.7mまでの範囲に礫敷が遺存しています。この西側は2m以上深く傾斜していき、第1調査区で確認された濠状の窪地につづくこととみられます。斜面の上面からは小礫が詰まった状態で検出され、礫を敷き詰めていたと考えられます。

なお、今回の調査でも古墳の築造時期を示す遺物は出土しませんでした。墳丘に土器や埴輪は列べられていなかったと考えられます。

### 3 調査の意義

今回の調査成果は、以下の3点に集約されます。

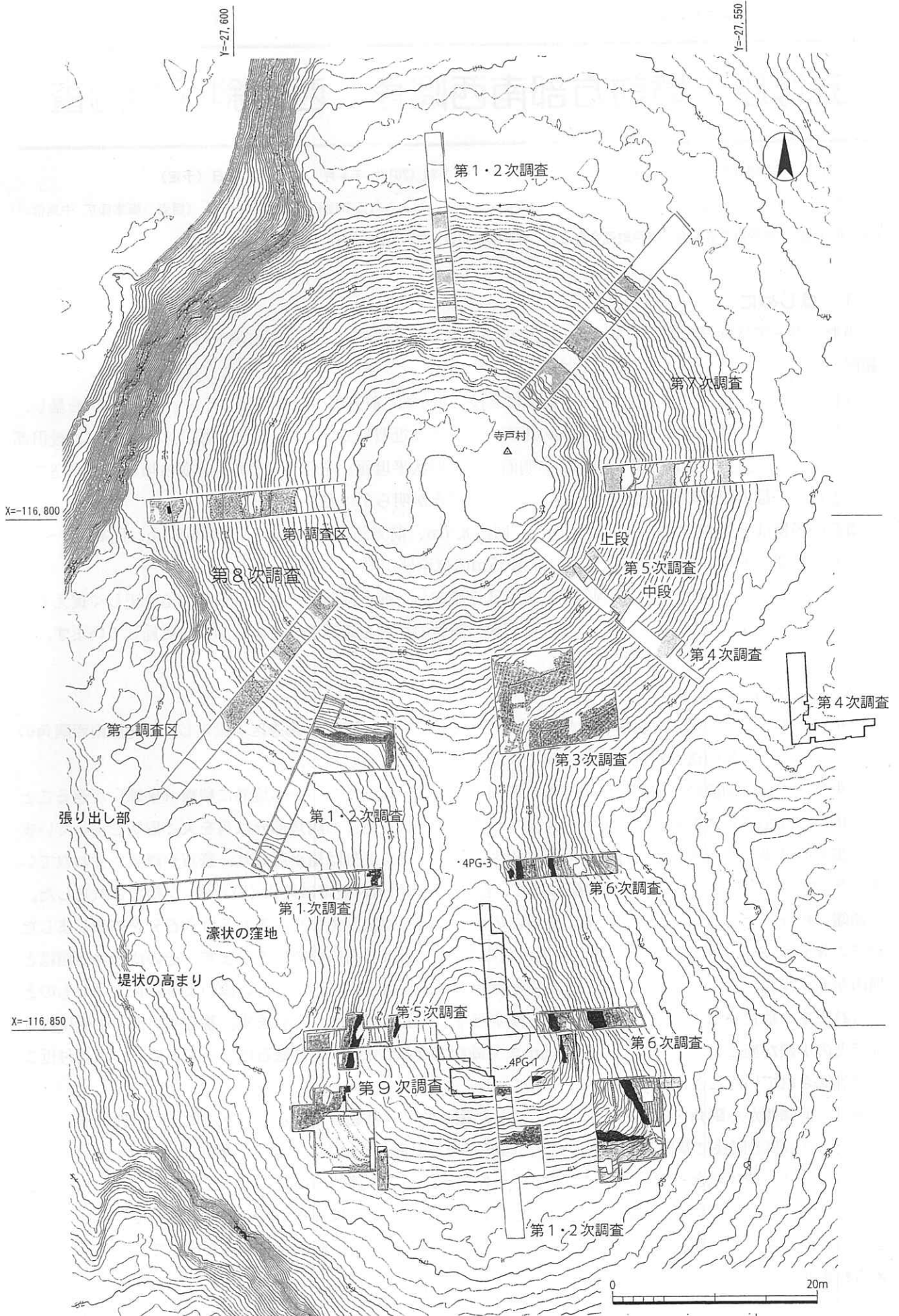
- ①前方部は精美なバチ形を呈すること、
- ②墳丘の築成は東側と同様に墳丘斜面の途中に斜路状平坦面を設けて二段に築かれていること、
- ③前方部の西側には濠状の窪地がありその南東側に礫を敷いていた可能性の高いこと。

バチ形については、平成26年度の調査で前方部東側の成果をもとに墳丘主軸から反転復原して全体の形状が把握されてきましたが、今回の調査によりこの想定が妥当であったことが確認されました。また、西側の段築についても、東側とほぼ同じ高さで墳丘の裾や各平坦面が築かれていることがわかりました。

濠状の窪地については、昭和52年の京都大学による墳丘の測量調査でその存在が最初に指摘され、西側の堤状の高まりとともにこれらが古墳に係る遺構であるのか注意が向けられるようになりました。しかし、平成12・13年度に実施した立命館大学による第1・2次調査の結果、窪地や堤状の高まりは遺構ではなく、自然地形であるとの見解が示されました。

今回の調査で窪地の南端が確認され、窪地全体の規模は南北約35mにおよぶことが判明しました。また、窪地の南東側では内傾する斜面上にも礫が施されていたとみられ、窪地は古墳の一部に含まれていた可能性が考えられます。窪地の周縁は墳丘の重要な箇所と隣接しており、北端は後円部くびれ部寄りに陸橋状の張り出し部があり、南端には前方部隅角がひかえています。また、西端では古墳が築かれた尾根筋の西側斜面がせまり、この縁辺に堤状の高まりが北西～南東方位にのびています。この高まりは張り出し部とつながり、前方部隅角に向かってのびています。

以上のことから、堤状の高まりと濠状の窪地は古墳に伴う付帯施設であるとあらためて評価することができ、本墳の西側には他の場所にはみられない特有の空間が形成されていた可能性が考えられます。



※第1・2・4・5次調査は立命館大学の成果による。

図1 五塚原古墳の調査成果図 (1/500)

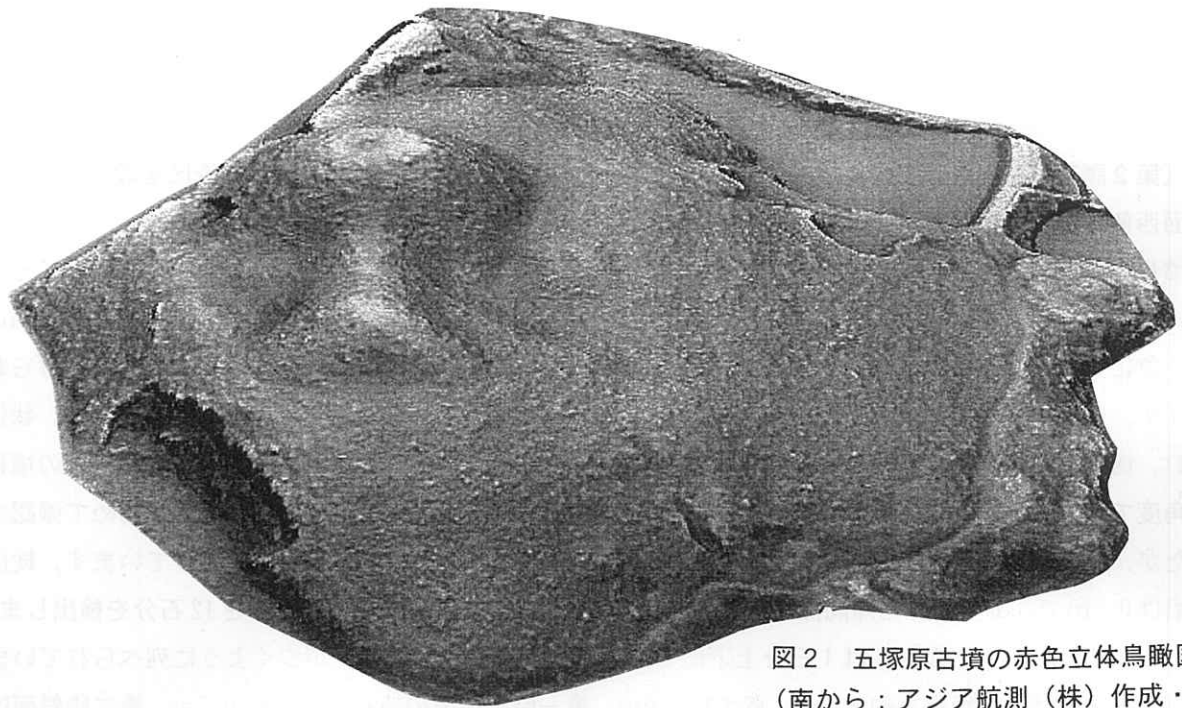


図2 五塚原古墳の赤色立体鳥瞰図  
 (南から: アジア航測(株)作成・提供)

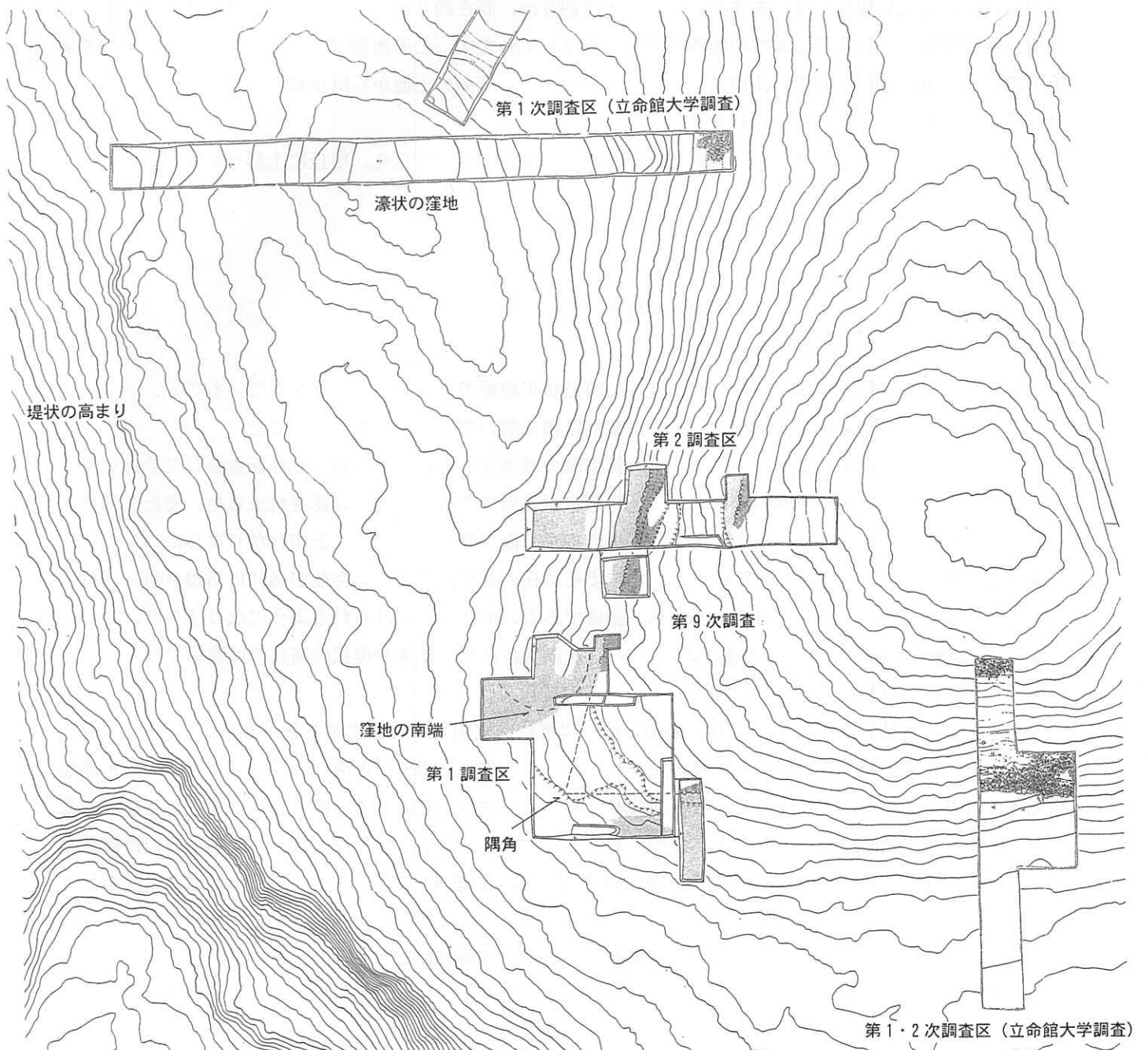


図3 第9次調査と周辺成果図 (1/250)